

韋応物悼亡詩論 序説

——十九首構成への懷疑——

黒田真美子

はじめに

「悼亡詩」とは、周知の如く西晋・潘岳（二四七—三〇〇）が創始したとされる亡妻を悼む詩である。潘詩は『文選』卷二十三に収録されているが、「悼亡」という語について、唐・李善（？—六八九）注は、「風俗通に曰く、終りを慎しみ亡を悼む、と」⁽¹⁾を引いている。「慎終」とは『論語』学而の「曾子曰く、終りを慎しみ遠きを追へば、民の徳、厚きに帰す」を踏まえ、「喪に其の礼を尽す」（朱注）の意である。したがって「悼亡」とは、礼を尽し、懇ろに死を悼むことを意味すると考えられよう。

此の如き原義が詩と結びついた経緯について、清・趙翼『陔餘叢考』（卷二十四）は次のように記す。

壽詩・輓詩・悼亡詩、惟だ悼亡詩のみ最も古し。潘岳・孫楚皆悼亡詩有りて、載せて文選に入る。南史に宋の文帝の時、袁皇后崩じ、上は顔延之をして哀策を為らしめ、上自ら「撫存悼亡、感今懷昔」の八字を益すと。⁽²⁾此れ悼亡の名の始まる所なり。崔祖思伝に、齊の武帝の何美人死し、帝墓に過り、自ら悼亡詩を為り、崔元祖をして之に和せしむ、と。⁽³⁾則ち齊梁より起くる。

時の皇帝が愛する女性の死を悼んで著名な詩人に作詩を命じたり自ら詩作したことが記され、「悼亡詩」という分野が遅くとも齊梁期において確立していたことが明らかにされている。それを裏付けるように、齊梁期の沈約「悼往」一首・江淹「悼室人」十首・庾信「傷往」二首が今に伝えられている。隋に下って、薛德音「悼亡」一首が見えるが、その後、管見の限り初唐盛唐には見当たらない。中唐初期に至って初めて、韋応物（七三七？—七七一？）の悼亡詩が出現する。しかも十九首という多篇が。趙翼が筆頭に挙げた潘詩は三首、孫詩は一首、そして右に列挙した詩人の篇数と比較すれば、韋詩の十九首の多数が際立つ。従来、悼亡詩は、潘詩に倣って三首連作が定型とされ、それは挽歌が三首であることと関連づけて説かれてきた。⁽⁵⁾しかしながら、齊梁期の三詩人の悼亡詩が三首構成ではないことでも明らかのように、必ずしも三首が定型とは断じ得ない。韋詩以降、清代までの主な悼亡詩の系譜を概観すれば、確かに、直近、元稹の「遣悲懷」、北宋・梅堯臣「悼亡」、南宋・王十明「悼亡」、明・何景明「悼亡」の四篇はいずれも三首であるが、それ以外の多数は三首構成を取らない。右の四篇は、挽歌を意識したというより、潘詩に拠ったといふべきであろう。さらに指摘すべきは、後述する如く、元稹は右の三首を含む三十三首、梅堯臣も総計四十余首を作成しており、清代に至るまでの悼亡詩史の中で、突出していることである。即ち元・梅両者の多篇作成の嚆矢として、韋応物の悼亡詩十九首が位置づけられよう。

拙論は、当初、悼亡詩の流れの中で、十九首が突如、なぜ出現したのか、それはいかなる特質を有するかについての考察を企図した。一方、横糸として、韋応物詩全体における悼亡詩の意味をも考究せんとする中で、十九首以外に悼亡詩と看做すべき十一首の詩篇を見出した。したがって、本論を展開する前に、それらが果して悼亡詩と断定し得るか否かを精査しなければならない。拙論を「序説」と題する所以である。それは右に記した如き「悼亡詩」定義の再考を迫るとともに、韋詩の独自性にも関わることになろう。

先づは悼亡詩の主人公である韋応物の妻について記述することから始めたい。

第一章 韋応物の妻

韋応物の妻については、これまで名前すら不明であった。それが、二〇〇七年十一月、韋応物の墓誌銘とともに、韋自らの手に成る妻の墓誌銘も発掘されたことよって、以下の事実が明らかになった。⁽⁸⁾

妻は河南の元氏、諱は蘋、字は仏力。①開元二十八年（七四〇）三月四日生まれ、元家は北魏・昭成皇帝（在位三三八―三七六）の末裔で、父挹は、尚書吏部員外郎、蘋はその長女。②天宝十五載（七五六）八月二十二日、京兆昭応県（今の西安市臨潼区）で、韋応物に嫁いだ。③大曆十一年（七七六）九月二十日、功曹東序内院の官舎で逝去。その時、長女は未婚、次女は五歳、長男慶復は数カ月。

右の事実を韋応物との関わりから捉えると、元蘋の家柄は、北周の高官を祖とする韋応物と同じく北朝出自の名門⁽⁹⁾であり、この縁組みは、つりあいの取れた、典型的「門当戸対」であったといえよう。

その家系をさらに調査すると、下記の如く興味深い三点が浮び上がる。一つは、すでに山田和大氏が指摘するように、元蘋との親族関係である。彼の曾祖父元延景は、元蘋等兄弟の曾祖父元延祚の兄であり、元蘋と元蘋等兄弟は、同世代に属している。⁽¹⁰⁾即ち、韋応物は元蘋との結婚によって、元蘋と姻戚関係を結ぶことになったのである。前述の如く、悼亡詩の系譜における元詩と韋詩の近きを想起すれば、この姻戚関係は重要な意味を持つ。元蘋の悼亡詩論において、改めて論じたい。

もう一つは、柳宗元（七三三―八一九）との関わりである。父元挹の子息（即ち元蘋の兄弟）は、注・洪・錫・銑の四人であるが、次男の洪（字は巨川）が饒州刺史だった時（元和六年八一―九年八一四）、永貞八司馬⁽¹⁴⁾

の一人呂温が饒州（江西省）に流謫されていた。洪は呂を高く評価し、呂を通じて、当時永州（湖南省）謫居の身の柳宗元を知得し、文を交している。⁽¹⁵⁾ 柳宗元との縁はそれだけに止まらない。元蘋逝去時、未婚だった長女⁽³⁾は、母に代わって弟妹の養育に励んだが、その後、楊凌（字は恭履）に嫁いだ。⁽¹⁶⁾ この楊凌は、大暦年間「三楊」として文名高き三兄弟の一人で、長兄は後の京兆の尹、楊馮、⁽¹⁷⁾ 即ち柳宗元の岳父である。三兄弟とも柳宗元の父鎮と交遊があり、鎮は凌を「最も文を善くす」と評していたという。⁽¹⁸⁾ 残念なことに、凌は早世し、柳宗元は彼の遺文集に序文を書き「学富み識遠く、才湧きて未だ已まず」と、その死を悼んでいる。⁽¹⁹⁾ 以上の如く、韋応物は娘の結婚によって、遠戚ながら、柳宗元と縁を結ぶことになったのである。柳宗元が楊馮の娘と結婚したのは貞元十二年（七九六）、韋の死後になるが、婚約は興元元年（七八四）、韋応物の滁州時代である。韋がその婚約を知っていた蓋然性は高いといえよう。二人の縁戚は、拙論のテーマとは直接関わらないが、「王孟韋柳」と称される自然詩人の系譜を想えば、看過し得ないのではないだろうか。

第三点は、元挹の三男、元錫（字は君貺）⁽²⁰⁾ についてである。元錫は、韋の詩集中、送別や贈答の対象として少なからず登場し、従来、親しい友人の一人として目されてきた。その交友は、建中、興元元年（七八四）の滁州時代まで及んでいる。⁽²¹⁾ 即ち妻の死から八年後まで、その弟との交流が続いていたのである。それは無論、錫との相性の良さが大きな理由であろうが、亡き妻への追慕が皆無とはいえないだろう。錫と関わりのある詩篇は、拙論の続編で考察したい。

次いで、韋応物の結婚の時期と場所⁽²⁾ が判明したことは、韋応物の履歴に於いて、重要な意味を有する。⁽²²⁾ 彼は十代半ば、父祖の恩蔭によって「右千牛」という玄宗皇帝の身近に控える近衛兵に選ばれ、⁽²³⁾

1 少事武皇帝 少くして武皇帝に事へ
無頼恃恩私 無頼にして恩私を恃む

(楊開府に逢ふ)⁽²⁴⁾

という特権階級を享受した。だが天寶十四載(七五五)に勃発した安史の乱によって、すべてを失う。玄宗は蜀へ逃れるが、その際、韋応物は扈從しなかつたことが、明らかになつたのである。従来、この点が不明だつたのは、深澤一幸「韋応物の歌行」⁽²⁵⁾が指摘するように、韋自身「温泉行」(巻九)などの作で右千牛時代を回顧しながらも安史の乱には殆んど言及していないからである。足かけ七年に亘る叛乱を飛び越えて、唐突に玄宗崩御が詠まれている。先に引いた「楊開府に逢ふ」においても、

5 驪山風雪夜 驪山 風雪の夜
長楊羽獵時 長楊 羽獵の時⁽²⁶⁾

6 一字都不識 一字も都て識らず
飲酒肆頑痴 酒を飲みて 頑痴を肆にす

7 武皇升仙去 武皇 升仙して去り
憔悴被人欺 憔悴して 人に欺かる

と本来、第六・七聯の間に歌われるべき安史の乱が欠落している。この謎について、深澤氏は、乱によって「破壊された世界は、玄宗が生きてさえいれば、復活が可能」だが、玄宗の死はその希望を完全に打ち砕いた。即ち、「彼にとって乱そのものよりも玄宗の死」の方が重かつたからと解す。しかし、今回②の事実によって、乱の欠落は、彼が、玄宗の逃避行に選ばれなかつた打撃の大きさゆえと解せるのではあるまいか。それは失職という現実の意味だけでなく、「恩私」が唯一の精神的拠り所であつた若き韋応物の生の基盤の瓦解にも等しい衝撃であつ

たに違いない。三十年後の回想(註)の中でも触れ得ないほどに。二十歳という人生の出発点におけるこの絶望的挫折感と安史の乱後の無秩序で荒廃した時代状況、この二点は韋応物の価値観の形成において重要な意味を有しており、それが詩作のパトスに大きな影響を及ぼしたであろうことは明白である。悼亡詩という極めて私的領域においては、殊に看過し得ない。即ち、二人の結婚は、長安陥落直後、公私ともに人生最悪の状況の中で挙行されたということである。その後の苛酷な日々を妻がただ一人理解して「憔悴して人々に欺かれた」彼を支えた。後述の如く、悼亡詩中、二人で「手を携へて」困難を乗り越えていったという妻への強い共感が、繰り返し詠まれるのは、右の二点に起因すると考えられるのである。

以上、墓誌銘の記述を出発点にして、韋応物との関わりという観点から、その他の資料をも用いて妻とその周辺を明らかにした。だが墓誌銘には、無論、彼女の為人も記されている。

動止札則、柔嘉端懿ずいなり。順ひて以て婦と為り、親を奉ずるに孝たり。嘗つねに内事を修理するの余あらば、則ち詩書を誦読し、華墨を斲習す。

孝・礼などの儒教的婦徳や、『詩経』『書経』を暗誦する教養を備え、書道にも秀でていた妻像が描かれている。この他、家事育児教育万般という一般的妻女の役割にも優れていたと記すが、注目すべきは、悼亡詩と重なる韋応物の哀しみと喪失感の吐露であろう。

余は年強仕(四十歳)を過ぎ、晩にして傷み易し。昏を望みて門に入る毎に、寒席に主無し。手沢衣賦じ、尚ほ平生を識り、香奩粉囊こういんふんのう、猶ほ故処に置く。器用百物、復た視るに忍びず。況んや生きては貧約に処り、歿しては第宅無きをや。永く以て負と為す。

ここには、四十歳を過ぎて老いを覚える韋応物の自意識を看取でき、それ故に一層、深まる悲哀と喪失感が率

直に表白されている。そして、貧しさのために儉約生活を余儀なくさせてしまい、亡くなる時には屋敷もなかつたことを述べ、それは取り返しつかない「とこしなえの負い目」と強い懺悔で結んでいる。この老いの自意識と喪失感、そして後悔の念が、悼亡詩にも詠まれている。ここでは指摘するに止め、次に、現在伝わる悼亡詩十九首の構成について論及する。

第二章 韋応物悼亡詩の十九首構成

韋応物の悼亡詩十九首は、卷六「感嘆」に収められており、第一首「傷逝」の題下注に「此の後の嘆逝哀傷十九首は、尽く同徳精舎の旧居にて傷懷せし時に作る所なり」と記されている。「同徳精舎」とは、大曆八年（七七三）頃、二年ほど勤めた河南府兵曹參軍を辞職した際、彼が身を寄せた洛陽郊外同徳寺の閑居先である。だが、十九首の中には「富平」（第二首、京兆府の属県、高陵の北）「昭国里」（第十首、長安城の坊里、朱雀門大街東第三街、北から第十坊）での作が含まれており、洛陽での作と看做し得るのは、第十九首のみである。孫望もこの題下注に疑義を呈し、韋応物の原注ではない蓋然性を説く。或いは原注だとしても、各種のテキストを校勘した結果、「時所作」を衍字と看做し、「同徳精舎での作が悼亡詩最後の篇（「同徳精舎の旧居にて傷懷す」に尽く）」という意味に解している。⁽²⁸⁾

右の疑義説を補強するのは、北宋嘉祐元年（一〇五六）執筆の王欽臣の序文である。

集十卷有れども、綴叙は猥りに並びて、旧次に非ざらん。今諸本を取りて校定し、部居する所に仍りて、其の雑廁を去り、十五総類に分ち、五百七十一篇を合し、題して韋蘇州集と曰ふ。⁽²⁹⁾

即ち、嘉祐元年の段階で、すでに原著は乱れており、王欽臣が収集整理して、十五類に分類し、五七一首を編

んだという。現在の伝本、校注本の構成を調べると、繫年編集の孫望本を除いて、殆んどが左記の如く、十四分類になっている。四部叢刊本を例に取ると、一、賦／二、雜擬／三、燕集／四、寄贈／五、送別／六、酬答／七、逢遇／八、懷思／九、行旅／十、感嘆／十一、登眺／十二、遊覽／十三、雜興／十四、歌行、五六一首である。第四類と第十四類は上下に分かれているので、どちらかを分別すれば、十五分類に数えられるであろう。赤井益久「韋応物伝説伝本攷」の説く如く「今に伝わる十四分類は王欽臣に始まる」と考えられるのである。したがって、第十一「感嘆」に収録されている悼亡詩十九首も、最終的には王欽臣の手が加わって構成された可能性が高いといえよう。

王欽臣（字は仲至）は『宋史』卷二九四に拠れば「清亮にして志操有り」、歐陽修に重んじられ「性は古を嗜む」とある。⁽³¹⁾ さすれば「清風」「古淡」と評される⁽³²⁾ 韋詩に、欽臣が心引かれたのも故無しではない。また、『崇文総目』を編んだ王堯臣が従兄であり、欽臣自身も、「蔵書数万卷」を有して、自ら校讐し、その成書は「世に善本と称されたという。現在に至るまで遵守されるテキストを作成し得るに相応しい人物といえよう。その彼が、果して悼亡詩をどのように編み直したか、今となつては正確には不明だが、その意図は下記の如く推考できる。

まず十九首の詩題・詩型を挙げれば、次の通りである。

- ①「傷逝」五古十二韻、②「往富平傷懷」五古十韻、③「出還」五古六韻、④「冬夜」五古八韻、⑤「送終」五古十二韻、⑥「除日」五律、⑦「对芳樹」（樂府）、五古四韻、⑧「月夜」五古三韻、⑨「嘆楊花」五律、⑩「過昭国里故第」五古十二韻、⑪「夏日」五律、⑫「端居感懷」五古九韻、⑬「悲紈扇」（樂府）五古三韻、⑭「閑齋对雨」五古四韻、⑮「林園晚霽」五古五韻、⑯「秋夜」其一、五律、⑰「秋夜」其二、五律、⑱「感夢」五律、⑲「同德精舍旧居傷懷」五律（なお五言古詩は、すべて一韻到底格）

右の十九首に共通するのは、すべて五言詩というだけで、詩題・句数・詩型すべて不揃いである。また潘岳悼亡詩三首（第一首春、第二首秋、第三首冬）間における修辭上の有機的関係性や江淹詩十首（第一・二首春、第三・四首夏、第五・六首秋、第七・八首冬、第九・十首仙界）のような斉合性⁽³⁴⁾は皆無である。逆に言えば、その融通無碍さが韋詩十九首の特徴の一つであり、多篇を生み出した理由にも関わってしよう。愛する人の死後、残された者は哀しみに打ちひしがれるが、その感情の起伏には波がある。詩人はその波の高まりに動かされて自ずと筆を取ったのである。挽歌のように、殯葬、送葬、埋葬、埋葬という葬礼の三段階に臨む、いわば決められた時だけではなく、冷たい雨の降り濡つ秋の夜、共に新緑を楽しんだ芳樹の下など、折節に妻を偲んで。

このように心の赴くまま自然に詠んだと考えられる十九首であるが、その構成については明確な基軸を看取し得る。それは、潘岳・江淹詩に則った四季の推移である。以下にそれを明らかにしよう。

まず第一首「傷逝」は、恐らく総序としての位置を占めるのであろう、特定の季語は見当たらない。

- 1 染白一為黒 白を染めむれば一に黒と為り
焚木尽成灰 木を焚けば尽く灰と成る
- 2 念我室中人 我が室中の人を念ふも
逝去亦不廻 逝去して亦た廻らず
- 3 結髮二十歳 結髮より二十歳
賓敬如始来 賓敬 始めて来るが如し
提携属時屯 提携 時屯に属し
- 4 契闊憂患災 契闊 患災を憂ふ

- 5 柔素亮為表 柔素 亮に表と為り
礼章夙所該 礼章 夙に該する所なり
- 6 仕公不及私 公に仕へて私に及ばず
百事委令才 百事 令才に委ぬ
- 7 一旦入閨門 一旦 閨門に入れば
四屋滿塵埃 四屋 塵埃に滿つ
- 8 斯人既已矣 斯の人 既に已ぬるかな
触物但傷摧 物に触れて但だ傷摧するのみ
- 9 单居移時節 单居して 時節移り
泣涕撫嬰孩 泣涕して 嬰孩を撫す
- 10 知妄謂当遣 妄を知りて謂ふ 当に遣るべしと
臨感要難裁 感に臨みて 要するに裁ち難し
- 11 夢想忽如睹 夢想 忽ち睹るが如く
驚起復徘徊 驚起して 復た徘徊す
- 12 此心良無已 此の心 良に已む無し
繞屋生蕞菜 屋を繞りて 蕞菜生ず

「白が黒に染まる」という色彩の変化が生から死への暗転のメタファとして詠まれ、印象的な始まりだが、第二聯とともに、二度と戻らない「妻の死の永遠」を歌って、導入とする。

第三く六联までは、二十年に及ぶ結婚生活を回顧し、そこに浮ぶ妻像を描出する。前述の如く、安史の乱に起因する世の乱れに共に手を携えて立ち向かい、有能で婦徳を備えた妻に家中の諸事万般、安心して委ねたと謡う。ここまでは、いわば〈昔〉を詠み、以後第七く九联は〈今〉の妻無き空室の悲哀を、赤子と共に涙するリアリティを伴って吐露する。第十联からは、妻への追慕の情も哀しみも、今後変わることもなく抱えていくだろうと〈未来〉における悲哀の不変性を訴えて結んでいる。

ここには、特定の季節表現はなく、第九联出句「单居移時節」に明らかのように、時の流れが巨視的に詠まれ、昔から今、そして未来へと大きく流れて行く。

だが第二首からは以下の如く、各首ともに何らかの季節表現を認めることができる。

第二首「富平に往きて傷懐す」は冬。

1 晨起凌嚴霜 晨に起きて嚴霜を凌ぎ
慟哭臨素帷 慟哭して素帷に臨む

妻逝去からほどなき頃、富平への巡視に赴く際の朝まだき嚴寒のさまを詠じている。

第二首「出還」も冬。

3 悽悽動幽幔 悽悽として幽幔動き
寂寂驚寒吹 寂寂として寒吹に驚く

ひっそりと静まりかえった殯室の帳が揺れ動き、そこに吹き込んだ木枯しの冷たさに、詩人はわななき震えている。

第四首は「冬の夜」

12 单衾自不暖 单衾 自から暖かならず
霜霰已皚皚 霜霰 已に皚皚たり

寢室の内の孤独感が、果てしなく真白に広がる室外の冷氣と呼応する。

第五首 「終りを送る」も冬。

6 日入乃云造 日入りて乃ち云に造り
慟哭宿風霜 慟哭して風霜に宿す

柩を墓地まで挽いてくると、日没になり、風吹き霜降り、心身ともに冷え込んだ詩人は胸突き上げられて慟哭する。

第六首 「除日」は春の始まり。

3 冰池始泮緑 冰池 始めて泮けて緑に
梅援還飄素 梅援 還た素を飄す

池の水もぬるみ、緑になれば、梅や櫻が早くも白い花を飄し揺れている。

第七首 「芳樹に対す」も春。

1 迢迢芳園樹 迢迢たる芳園の樹
列映清池曲 列なり映る 清池の曲

湾曲した池の清らかな水面に、芳わしい緑樹がどこまでも長く連なって映っている。

第八首 「月夜」も春。

11 皓月流春城 皓月 春城に流れ

華露積芳草 華露 芳草に積もる

銀色に輝く月光が春の街に隈無く降り注ぎ、芳わしい草花を潤している露の玉を煌めかせる。

第九首「楊花を嘆ず」も春。

1 空蒙不自定 空蒙として自ら定まらず

況値暄風度 況んや暄風の度るに値ふをや

かわやなぎの白い綿毛も空一杯にふわふわ飛んで、霞が柵引くよう。春風がそよ吹けば、一層ふわふわ舞い上がる。

第十首「昭国里の故第に過る」も春。

2 物変知景暄 物変じて 景の暄あたたかなるを知り

心傷覚時寂 心傷み 時寂を覚ゆ

長安昭国里の旧居(35)を再訪すると、庭の植木や草花、そこに遊ぶ鳥、みな種類が変わり、暖かい季節の訪れに気づいたが、それについても一入深まるわびしい思い。

第十一首は「夏の日」。

2 無人不昼寝 人の昼寝せざる無く

独坐山中静 独り坐して 山中静かなり

昼の長い夏に、他の人は皆昼寝をしているが、一人眠れず、詩人は山の静寂の中でつくねんと座り込んでいる。

第十二首「端居感懐」は夏。

8 夏木遽成陰 夏木 遽かに陰を成し
緑苔誰復履 緑苔 誰か復た履まん

夏の木立ちは 勢いよく茂るが、その下の苔生した緑陰を訪れる人はもはやいない。

第十三首「紈扇を悲しむ」は秋。

11 非関秋節至 秋節の至るに関するに非ず
詎是恩情改 詎ぞ是れ 恩情改まんや

秋が来ようと来まいと、愛する気持は決して変らない。

第十四首「閑斎にて雨に対す」も秋。

4 端居念往事 端居して往事を念ひ
倏忽苦驚颺 倏忽 驚颺に苦しむ

世の片隅で為すべきこともせず思い出に耽っていると、突然の冷たいつむじ風にぞくつとする。

第十五首「林園晩に霽る」も秋。

2 山多烟鳥乱 山多く 烟鳥乱れ
林清風景翻 林清く 風景翻る

連なる山々の上、夕もやのたなびく中、鳥たちが乱れ飛び、雨に洗われた林は清々しく、木洩れ日が風に揺れている。

第十六、十七首は「秋夜」二首。

第十八「夢に感ず」も晩秋。

3 綿思 靄流月 綿思 流月 靄たり
驚魂 颯廻颯 驚魂 廻颯 颯たり

まどろみの中で妻の姿を見てハッと目覚めれば、尽せぬ思いのままおぼろに流れる月光に包まれていた。そこにヒューと吹きつける冷たいつむじ風、水を浴びせかけられたように心乱れる。

そして、最後の第十九首「同徳精舎の旧居にて傷懷す」には、季語は見えず、十年ぶりに洛陽の旧居を一人で再訪せざるを得ない哀しみを詠ず。

3 時遷跡尚在 時 遷るも 跡 尚ほ在り
同去独来帰 同に去りて 独り来り帰る

十年の時の経過を巨視的に謡う。

以上をまとめると、十九首の構成は、第一首と第十九首が巨視的時間の推移を詠み、中の第二〜十八首は、冬から始まり秋に終わる四時の配分を基軸としていることが明らかになったといえよう。

第三章 十九首以外の悼亡詩の可能性

第二章において十九首構成の基軸を明らかにしたが、それは原著に基づくものか、それとも王欽臣に拠るものなのか、現在に至っては断定し得ない。だが、その際、参考になるのは、元稹の悼亡詩三十三首であろう。先述の如く、元稹は元蘋の縁戚であり、悼亡詩の系譜においても章詩に最も近く、技法的にも「小主題による多角的表現」という章詩を継承している。さすればその構成も、章詩を参考にした可能性が考えられるからである。もつとも彼自らが編んだとされる『元氏長慶集』一百卷は、唐末から五代にかけての戦乱時にすでに散逸し

ている。拙論で底本とする六十巻本（冀勤點校、『元稹集』中華書局、一九八二年八月）の源³⁷というべき宋版六十年も隔たり、その時点ですでに四十巻失なわれている。悼亡詩も恐らく当時のままではないだろう。だが元稹は白居易に寄せた「叙詩寄樂天書」（卷三〇）において、「不幸にして少くして伉儷の悲しみ有り。存を撫し往く感じて数十詩を成し、潘子の悼亡を取りて題と為す」と記している。さすれば、底本第九巻「傷悼」所収の三十三首は、この「数十詩」とほぼ合致するのではないだろうか。

元詩三十三首の詩題は以下の通りである。

- ① 「夜間」 ② 「感小株夜合」 ③ 「醉醒」 ④ 「追昔遊」 ⑤ 「空屋題」 ⑥ 「初寒夜寄盧子蒙」 ⑦ 「城外回謝子蒙見諭」 ⑧ 「諭子蒙」 ⑨ ⑩ ⑪ 「三遣悲懷」 ⑫ 「旅眠」 ⑬ 「除夜」 ⑭ 「感夢」 ⑮ 「合衣寢」 ⑯ 「竹簟」 ⑰ 「聽庾及之彈烏夜啼引」 ⑱ 「夢井」 ⑲ ⑳ ㉑ 「江陵三夢」 ㉒ 「張旧蚊幃」 ㉓ 「独夜傷懷贈呈張侍御」 ㉔ ㉕ ㉖ 「六年春遣懷八首」 ㉗ 「答友封見贈」 ㉘ 「夢成之」

今、三十三首の詳細な分析は稿を改めることにして、構成に限って韋詩と比較すれば、次の二点が明らかになる。その一は、季節の推移に関して、元詩も以下の如く四季表現を認め得る。

- 秋 ① ② ④ （以上元和四年） ⑬ ⑭ （元和五年）、冬 ⑥ ⑦ ⑫ ⑬ （元和四年） ⑳ （元和五年）、春 ⑱ （元和五年）
 ㉔ ㉕ ㉖ （元和六年）、夏 ⑯ ㉑ ㉒ （元和五年）

元稹の妻韋叢（字は茂之）が亡くなったのは、元和四年七月九日であり、埋葬されたのが十月十三日³⁸、それゆえ、秋から冬にかけての作が多いのであろう。ここで注目すべきは季語や季節表現が認められない詩篇が十二首に達することである。右の如く「除夜」「感夢」は韋詩と同じ詩題であり、元稹が韋叢悼亡詩に倣ったとする根

抛の一つと考えられるが、そうなると、韋の悼亡詩にも、本来、季節表現の無い詩篇が含まれていたのではあるまいか。すなわち、季節を基軸とした十九首の構成は、王欽臣が整理編集した蓋然性が高いと考えられるのである。彼がいみじくも序文で「其の雜廁を去」つたと明言するように、季節表現の無い悼亡詩を取り去って、他の「部居」に組み入れたのである。

右の観点から、本来悼亡詩に入るべき詩篇を捜求すると、「夜聞独鳥啼」(卷八「雜興」、五絶)が該当作として挙げられる。⁽³⁹⁾

失侶度山覓 侶を失ひ 山を度りて覓め^{もと}

投林舎北啼 林に投じて舎北に啼く

今将独夜意 今 独夜の意を將^もつて

偏知对影棲 偏へに知る 影に対して棲むを

つがいの片割れを見失い、捜し求めて啼く鳥の悲痛な姿は、妻亡き夜、自らの影を見つめて一人寝の哀しさを深める詩人の姿に重なっている。これは拙論冒頭に記した愛する妻の死を懇ろに悼むという悼亡詩の定義に則る作であるといえよう。そして、夜という時間帯は明らかだが、明確な季語は見られない。⁽⁴⁰⁾それよりも「独鳥啼」という主題が優先され、動植物、虫鳥類などを詠む「雜興」に配されたのである。

元詩にあつて韋詩にはないもう一つは、知友に宛てた「寄贈」「酬答」の作である。この分類の中からは「寺居独夜、寄崔主簿」(卷二、五古四韻)を掲げよう。

1 幽人寂不寝 幽人 寂として寝ねず
木葉紛紛落 木葉 紛紛として落つ

2 寒雨暗深更 寒雨 深更に暗く

流螢度高閣 流螢 高閣を度る

3 坐使青燈曉 坐そぞろに青灯をして曉あきらかならしむれば

還傷夏衣簿 還また傷む 夏衣の薄きを

4 寧知歳方晏 寧なんぞ歳まの方まに晏くるるを知らんや

離居更蕭索 雜居 更に蕭索たり

陶敏・孫望両注ともに本篇は大暦十四年秋、(妻の死の四年後)、櫟陽(陝西省富平県)の県令を辞して、長安西郊、澧水の岸辺にある善福精舎での閑居時の作とする。「幽人(隱遁者)」と自称する詩人が、孤独を抱えて、秋の夜長に眠れぬ姿を浮び上らせている。韋応物は「雨」を謡うことが多い。⁽⁴⁾ここでも、冷たい雨に閉ざされた真夜中の空間に季節はずれの弱々しい螢が迷い込み、おぼろに揺れる青い灯に照されて、ゆるゆると光の尾を引いて過っていく。見るともなく見入っていた詩人は、秋の寒気に虚を衝かれる。まだ夏の薄着のままの哀れな身上に、一層深まる哀切の情。即ち、秋になれば、詩人の衣類に配慮してくれるはずの妻の不在を詠んでいるのである。これが悼亡詩でないといえようか。更に決定的なのは「還傷夏衣簿」は、潘岳悼亡詩第二首第三聯「凜凜として涼風升起 始めて覚ゆ 夏衾の單なるを(凜凜涼風升 始覚夏衾單)」を踏まえていることである。このように、悼亡詩と看做し得る本篇がなぜ十九首の中に入れられなかったのか。それは、本篇が「寄贈」詩であるため先に掲げた王欽臣の分類上、卷二の「寄贈上」に配分されたからに他ならない。この他、「寄贈」上収録の「過扶風精舎旧居簡朝宗巨川兄弟」「四禪精舎登覽悲旧寄朝宗巨川兄弟」の二首も、悼亡詩と看做せる。「朝宗、巨川兄弟」とは、上述の如く、元瓚の兄弟、元注、元洪(長男・次男)を指す。前者の「扶風精舎の旧居」とは、安

史の乱を避けて、新婚の二人が身を寄せた陝西省鳳翔府扶風の仏寺である。妻の死後まもなく、その旧居を訪れた時の悲哀を妻の兄弟に率直に吐露している（五古七韻）。前半で仏寺の変わりようと、「此に迫おぼびて独り仲仲たり」「零落して故老に逢ひ、寂寥、草虫に悲しむ」と自身の悲哀を詠んだ後、後半の三聯は、次のように謡う。

5 栖止事如昨 栖止 事は昨の如きも

芳時去已空 芳時 去りて已に空し

6 佳人亦攜手 佳人も亦た手を攜ふるに

再往今不同 再往 今同じからず

7 新文聊感旧 新文 聊か旧に感じ

想子意無窮 子を想ひて 意 窮まり無し

往時の良き思い出は、まるで昨日のように鮮やかに浮ぶのに、それはもう遙か昔のことになってしまった。この発想の眼字である「如昨」は章の悼亡詩第六首「除日」冒頭にも見られ（「思懐耿として昨の如し」）、さらに言えば、潘岳悼亡詩第三首の

4 念此如昨日 此を念へば 昨日の如きも

誰知已卒歲 誰か知らん 已に歳を卒ふとは

に基づいている。また第六联出句「佳人」は、章の悼亡詩第七首「对芳樹」第四联でも「佳人再びは攀ぢざるも下に往來の躡おと有り」と詠む。妻を「佳人」と呼ぶのは、江淹の悼亡詩に始まっている。さらに「攜手」は後者の「四禅精舎……」にも見えるが、⁽⁴²⁾章の悼亡詩中「永く絶たる、攜手の歎」（第十首「過昭国里故第」第十九句）などに用いられ、前述の如く、苦難を共に乗り越えたという共感を表わす章の妻に対する基本的詩語である。後者

の「四禅精舎…」については、紙幅の都合で省略するが、妻の兄弟に寄せたこの二篇は、紛れもなく悼亡詩といえよう。

以上のように、右の三首は、本来悼亡詩であったが「寄贈」の形式のため、卷二に組み入れられたと推論し得るのである。

此の如き推論に基いて、各部居を搜索すると、卷六の「懷思」に「雨夜感懷」(五古四韻)「発蒲塘駅沿路見泉谷村野忽想京師旧居追懷昔年」(五古八韻)、「行旅」に「経武功旧宅」(五古七韻)の三首、卷八の「雜興」に「秋夜」(五古四韻)「对雑花」(五古四韻)「子規啼」(七絶)「郡齋臥疾絶句」(五絶)四首計七首が悼亡詩と看做し得る。その所以を以下に記そう。「雨夜感懷」も先に悼亡詩として引いた「寺居独夜…」と同様、詩人は小糠雨が降りそぼる夜、眠れぬまま孤独感に打ちひしがれる心中を詠んでいる。

2 耿耿心未平 耿耿として心未だ平かならず

沈沈夜方半 沈沈として 夜 方に半ばなり

3 独驚長簾冷 独り驚く 長簾ちやうてんの冷きに

遠覚愁鬢換 遠かに覚ゆ 愁鬢の換はるを

「長簾」は、潘岳悼亡詩第二首の「展転として枕席を晒みれば、長簾 牀に竟りて空し(展転晒枕席、長簾竟牀空)」を踏まえ、一人寝のわびしさを詠む。これは、元詩の⑩「竹簾」にも類す。また愁いのために鬢が白くなつたという老いの自覚は、十九首の内、「咨嗟す 日々復た老ゆるを(咨嗟日復老)」(第三首「出還 第九句)「晚歳 夙志湍しゅくしみ(晚歳夙志湍)」(第四首「冬夜)「傷多く人自ら老ゆ(傷多人自老)」(第八首「月夜)など悼亡詩に散見する自意識である。

「蒲塘駅を發して路に沿ひて泉谷の村墅を見、忽ち京師の旧居を想ひ、昔年を追懷す」は、貞元二年（七八六）江州（江西省）刺史として属県を視察中、都の旧居を思い出した追想の作である。前半は、春風の中、巡視の馬を進める様子を詠むが、もやに煙る谷川の景色が、詩人を過去へと誘う。

5 荏苒斑鬢及 荏苒として斑鬢及び
夢寢婚宦初 夢寢す 婚宦の初め

6 不覺平生事 覺えず 平生の事
咄嗟二紀余 咄嗟に二紀余なるを

7 存没闊已永 存没 闊として已に永く
悲多歎自疏 悲しみ多く歎び自ら疏なり

8 高秩非為美 高秩は美と為すに非ず
闌干淚盈裾 闌干として 淚 裾に盈つ

「荏苒」は、潘岳悼亡詩第一首冒頭の詩語「荏苒として冬春謝り、寒暑忽ち流易す（荏苒冬春謝、寒暑忽流易）」で、歲月が次第に流れ行くさまを意味する。二十四年以上（二紀余）の思い出の中心は妻であり、その喪失のために、「悲しみ多」い人生で、詩人は裾を濡らすほどに滂沱として涙を流している。

「武功の旧宅を經」の「武功」とは、京兆府西方の地で、安史の乱による長安陥落の二ヶ月後に結婚した韋応物は、新妻とともに、その地の宝意寺に乱を避けたのである。乾元元年〜二年（七五八〜九）の頃と考えられる。詩中、

2 歴載俄二九 載を歴ること俄かに二九
始往今來復 始めて往き 今 來復す

「二九」即ち十八年後、大曆十一、十二年（七七六・七七七）頃の再訪で、彼は当時、京兆府功曹參軍であった。大曆十二年春（「茫茫として野田緑なりとある」）ならば、正に元殯逝去の翌春のことである。ここには特に潘・江詩を踏まえる詩語は見えないが、風雨に洗われ朽ちた垣根や建物を謡った後、「樹に羈き雌しの宿する有り（樹有羅雌宿）」（第十句）と庭の樹に、伴侶を失った雌鳥（羈雌）を登場させ妻の化身のように想わせる。最後は、こ
う歌う。

7 欲去中復留 去らんと欲して中ごろ復た留まり
徘徊結心曲 徘徊して 心曲 結ぼる

去ろうとしても足は進まず、憂いに沈む心を抱えていつまでも行きつ戻りつする詩人の姿。それは、妻との思
い出が、彼を引き止めているに他ならない。

「秋夜」は、十九首に連作二首（⑩⑪）あり、卷八のこの作も、連作二首と同じ詩型の五言古詩四韻。内容的に
も、秋の冷涼感の中で、一人眠れず悲愴に沈み込む心中を詠み、二首と酷似する。

1 暗窓涼葉動 暗窓に 涼葉動き
秋齋寢席單 秋齋 寢席單なり

この「寢席單」は、潘詩第二首第三联（前掲）を踏まえて、妻の不在を意味している。

3 一與清景遇 一たび清景と遇はば
每憶平生歎 毎に憶ふ 平生の歎

4 如何方惻愴 如何ぞ 方に惻愴せん

披衣露更寒 衣を披きて 露 更に寒し

「平生歎」は、十九首中の「秋夜」其一にも「惆悵たり平生の懐ひ」（第七句）と見える。詩型、内容、典故、詩語ともに十九首中の「秋夜」と酷似するにもかかわらず、なぜ当該作のみ巻八に配されたのか不明である。

「対雑花」は、庭園に咲き乱れる花々に向かつて「單棲 遠郡を守」る身で「永日 重門を掩ふ」ような暮しでは、花以外に共に語り合う相手もないとい嘆いている。

「子規啼⁽⁴⁵⁾」「郡齋にて疾に臥す 絶句⁽⁴⁶⁾」の二首に関しては、紙幅の都合もあり、各々評語を引くだけで、贅言を略すことにする。前者に関しては、南宋・劉辰翁（一二三二—一二九七）が「比れ必ず悼亡の後の作にして、次第見る可し」（和刻本巻八十七）と記す。後者は、陶敏氏が「亡妻を懷念して作る」と詩題に注している。いずれも悼亡詩と認めることに吝かではないといえよう。

小結

従来、各本において韋応物の悼亡詩は十九首と看做されてきた。それは恐らく北宋の王欽臣が、四季の推移を基軸にして「雜厠」を取り去った結果、連作としてまとめられたと考えられる。今回、右の考察の結果、新たに十一首を悼亡詩と認定することができたのではないだろうか。この推論が当を得ているならば、悼亡詩の系譜において、韋詩は、これまで以上に質量ともに画期的意味をもつと評価できよう。詩形においては、五律・七絶という近体詩を含み、妻逝去後、何年にも亘って綿々と謡い継がれている。従来、悼亡詩の概念（一、三首構成、二、没後一年の製作、三、五言古詩）を大きく塗り変えることになった絶唱、それが韋応物の悼亡詩と断じ得る

のである。

今後、本論として、右の三十首を対象に悼亡詩の系譜における位置づけと、韋詩全体に占める意味を中心に論考する予定である。

注

- (1) 漢・応劭撰『風俗通義』卷四「過誉」に見える語。
- (2) 『南史』卷十一后妃上「文元袁皇后」伝。「哀策」とは、天子、后妃の生前の徳を賞揚する韻文。
- (3) 『南史』卷四十七「崔祖思伝」、崔元祖は、祖思の子息。
- (4) 西晋・孫楚（?—二九三）に「除婦服詩」一首（四言古詩四韻『孫馮翊集』所収）がある。
- (5) 入谷仙介「悼亡詩について—潘岳から元稹まで—」（『入矢教授、小川教授退休記念中国文学語学論集』筑摩書房、一九七四年）参照。
- (6) 西岡弘「中国古代の喪礼と文学」文学篇第三章哀祭文学第一節挽歌（汲古書院、二〇〇二年五月）五二—頁。
- (7) 韋応物以降、元稹、梅堯臣、王十朋、何景明以外の主要詩人の悼亡詩とその篇数は以下の通り。「唐」孟郊「悼亡」一首、劉禹錫「謫居悼往」一首、趙嘏「悼亡」二首、王渙「悼亡」一首、「五代」韋莊「悼亡姬」五首「北宋」歐陽修「綠竹堂独飲」一首、張耒「悼亡」九首、陸田「悼亡」二首、「南宋」姜特立「悼亡」一首、「金」李俊民「悼亡」一首、「元」楊弘道「悼亡」一首、虞集「悼亡」四首、「明」楊慎「新秋悼亡」二首、王世貞「周恭人悼亡」二首、「清」顧炎武「悼亡」五首、施閏章「悼亡」二首、吳偉業「追悼」一首、屈大均「哭内子王華姜」十二首、王士禎「悼亡」三十五首、厲鶚「悼亡姬」十二首。
- (8) 「故河南元氏墓誌銘 朝散郎前京兆府功曹參軍韋応物撰并書」また、山田和大「新出土韋応物妻元蘋墓誌」（『中国学研究論集』第二二号、二〇〇八・十二）参照。
- (9) 丘丹書「唐故尚書左司郎中蘇州刺史京兆韋君墓誌銘并序」に拠れば、韋家は、北周の韋夔（いけ逍遙公）の流れを汲み、曾

- 祖父待価は則天武后期の尚書左僕射・同中書門下平章事、祖父令儀は梁州都督、父鑾は宣州司法參軍、応物はその三男。
- (10) 前掲論文(注(8))六一頁。
- (11) 元積は、元蘋等兄弟の従兄弟(父の末弟元持の子息)の墓誌銘「故京兆府整^{ちやうちつ}厓縣尉元君墓誌銘」(『元氏長慶集』卷五三)を草しており、文中、元蘋の兄弟元洪の子息、元晦が元積に執筆を依頼したと記す。
- (12) 入谷仙介前掲論文注(5)参照。「方法的には韋応物の、小主題の積重ねによる大主題の多角的表現という方法を継承」(一一二頁)。
- (13) 『新唐書』卷七五下「宰相世系表五下」
- (14) 永貞元年(八〇五)、王叔文、王伾等八人を中心とした画期的政治改革が、理解者であった順宗の退位などにより潰え、既得権益を有した宦官や高官の反撃に遭って謀反とされ、八人は司馬として地方に左遷された。その中に柳宗元、劉禹錫も含まれる。
- (15) 「元洪宛ての返書二通が柳の別集に収録されている。」「答元饒州論春秋書」(『柳宗元集』卷三二)「答元饒州論政理書」(卷三二)
- (16) 嫁ぐ日のことを、韋応物は「幼為長所育、両別泣不休」「帰來視幼女、零淚縁纓流」(『送楊氏女』卷四)と二人姉妹の涙の別れを詠んでいる。
- (17) 楊馮、字は虚受、大曆九年(七七四)進士科状元及第後、監察御史、礼部・兵部郎中、刑部侍郎などを経て京兆尹となり、元和四年(八〇九)、御史中丞李夷簡によって弾劾され、賀州臨賀(広西省)の尉に左遷された(『旧唐書』卷一四六、『新唐書』卷一六〇)。この左遷事件は張籍「傷歌行」にも詠まれていて名高い。その経緯及び柳宗元との関係も含めて、丸山茂「唐代の文化と詩人の心」第一部第二章(汲古書院、二〇一〇年二月)に詳しい。
- (18) 「先君石表陰先友記」(『柳宗元集』卷十二)
- (19) 「楊評事文集後序」(『柳宗元集』卷二二)
- (20) 元錫は元和四、五年(八〇九、八一〇)頃、衢州刺史を皮切りに、婺州(元和六?八年)、蘇州(元和八?十年)、福州(元和十?十四年)、宣州(元和四?十五年)など各州刺史を歴任。(『唐刺史考全編』参照)

- (21) 「寄李儋元錫」(巻三)は、陶敏、孫望両氏とも興元元年春の作とする。
- (22) 前掲山田論文(注8)六十頁にも、重要性の指摘がある。
- (23) 丘丹書墓誌銘(前掲注(9))参照。
- (24) 拙論に引く韋応物詩の底本は、四部叢刊所収『韋江州集』。対校本は、元刻本影印『須溪先生校本 韋蘇州集』(福建人民出版社、二〇〇八年十月、以下「元刻本」と称す)。当該詩は巻五所収。なお、適宜、下記の三校注本を参照。陶敏・王友勝校注『韋応物集校注』(上海古籍出版社、一九九八年十一月、以下「陶校注本」と称す)。阮延瑜校注『韋蘇州詩校注』(華泰文化事業股 有限公司、二〇〇〇年十一月、以下「阮校注本」と称す)。孫望編著『韋応物詩集繫年校箋』(中華書局二〇〇二年三月、以下「孫校箋本」と称す)。併せて宋・劉須溪先生校本『韋蘇州集』(和刻本漢詩集成第八輯所収)をも参照。なお二句にまたがる上の数字は、第何联かを表わしている。以下同じ。
- (25) 『中国文学報』第二十四冊、一九七四年十月。五九—六〇頁。
- (26) 「驪山」は「長恨歌」で有名な温泉宮(華清宮)のある山。韋応物は「驪山行」(巻十)で離宮の華麗さを仙宮に比して詠ず。「長楊」は、もと秦の宮殿で、玄宗の狩場の行宮。
- (27) 「逢楊開府」は、陶敏、孫望両氏とも、建中三、四年(七八二、三)頃の作とする。
- (28) 孫校箋本一三六頁。
- (29) 王欽臣序「有集十卷、而綴叙狼狽 非旧次矣。今取諸本校定、仍所部居、去其雜廁、分十五総類、合五百七十一篇、題曰韋蘇州集」。
- (30) 赤井益久「韋応物伝記伝本攷」(『國學院雜誌』第七十九卷第九号一九七八年十月)。
- (31) 王洙(侍読学士、侍講学士を兼任し、博覧強記で有名)の子。元祐の初め(一〇八六)、工部員外郎、紹聖元年(一一〇九四)、集賢殿修撰から和州(安徽省)、饒州知事。最後の官は、徽宗の時、知成徳軍。したがって、韋集を編んだのは、青年時代と考えられる。
- (32) 司空図「與王駕評詩書」は「(王) 右丞、蘇州趣味澄寛、若清風之出岫」、蘇軾「書黄子思詩集後」は「独韋応物、柳宗元発纖穠於簡古、寄至味澹泊、非余子所及也」と評す。

(33) 斎藤希史「潘岳(悼亡)詩論」(『中国文学報』第三九冊、一九八八年十月) 参照。第一首(春)十三韻(一韻到底格)、第二首(秋)十四韻(換韻格)、第三首(冬)十七韻(換韻格)と句数も押韻も異なりながら、季節推移を基軸として修辭的に緊密な有機的関連性を指摘する。

(34) 拙論「江淹の悼亡詩」(『日本文学誌要』第五八号一九九八年七月) 参照。十首すべて五古五韻で統一され、春夏秋冬に二首ずつ配当し、第九・十首で仙界を詠んでいる。

(35) 「昭国里」は、韋応物が京兆府功曹だった時の住居。

(36) 底本は「夕」に作る。今、『唐詩品彙』卷十五などの諸本に拠って「多」に従う。

(37) 元稹の詩文集の成書伝播については、花房英樹・前川幸雄「元稹研究」(彙文堂、一九七七年三月) 第二部「作品総合研究」(『文集伝本の系譜』参照。繫年については、楊軍箋注『元稹集編年箋注』(三秦出版社、二〇〇二年六月) 参照。

(38) 韓愈「監察御史元君妻京兆韋氏夫人墓誌銘」(『韓昌黎文集』卷二四) に拠る。

(39) 代偉「論韋応物的悼亡詩」(『牡丹江教育学院学报』第一一一期、二〇〇八・二) の指摘に拠る。以下の三篇も悼亡詩として対象とするが、その理由については、言及していない。「発蒲塘駅沿路見泉谷村墅忽想京師旧居追懷昔年」(卷六「懷思」)「子規啼」(『郡齋臥疾絶句』(以上卷八「雜興」))

(40) ただし、「舎北」とあるので、渡り鳥と考えれば、秋を意味するだろう。

(41) 旧稿「韋応物詩論―雨の時空―」(『日本文学誌要』第六六号、二〇〇二年七月) 参照。本篇についても九〇十頁に解説。

(42) 第七联「携手思故日、山河留恨情」と詠ず。さらに第八、九联は「存者遯難見、去者已冥冥。臨風一長慟、誰畏行路驚」と歌い結び、妻の死を悼み慟哭する。

(43) 旧稿(前掲注(41))十〇十一頁参照。

(44) 旧稿(前掲注(41))八頁参照。「登宝意寺上方旧游」(卷七「登眺」)題下注に「寺は武功に在り、曾て此の寺に居る」と記す。

(45) 高林滴露夏夜清 高林 露を滴らせて夏の夜清く

南山子規啼一声 南山 子規 啼くこと一声

隣家孀婦抱兒泣 隣家の孀婦 児を抱きて泣き

我独展転何時明 我 独り展転として 何れの時にか明けん

(46) 香炉宿火滅 香炉 宿火滅し

蘭灯宵影微 蘭灯 宵影 微かなり

秋斎独卧病 秋斎 独り 病に卧し

誰与覆寒衣 誰と与にか寒衣を覆はん

〔追記〕

初校後、胡旭著『悼亡詩史』（東方出版中心、二〇一〇年四月）を入手した。第二章第二節「韋応物（斯人既已矣）」において、拙論と同様、悼亡詩対象として十九首以外に、20「夜聞独鳥啼」21「子規啼」22「雨夜感懷」23「有所思」24「発蒲塘駅沿路見泉谷村墅忽想京師旧居追懷昔年」25「秋夜」26「七夕」27「对残灯」の八首を付加し、さらに、悼亡が主題ではないが、亡妻に関わり、悼亡の情が表われているとする作品を六首掲げている。但し、妻の姓氏は不詳とし、八首追加の理由も記さない。また、拙論と重ならない23、26、27は、悲哀寂寞の情は認められるが、必ずしも悼亡詩とは断定し得ない。胡著についての詳細は本論で言及したい。